

おわりに

災害対策小委員会 遠藤 尚文

震災直後、千年に一度といわれていましたが、本誌刊行時、実は「数百年に一度」とされる東日本大震災に遭遇し、東北在住の多くの方々が安寧の時を失いました。甚大な被害を受け、今なお心身ともに苦闘を続けておられる方々には、本誌編集部一同、心からお悔やみを申し上げます。

この冊子では、震災直後から病院スタッフが如何に行動し、意外に身近にあった災害から「日常」を如何にして取り戻そうとしたかの数週間の軌跡が示されております。

この冊子には、当院職員が、災害を生き抜く被災者として、医療者としての職業意識をもった専門職として、さらに赤十字の誇りを掛けた一人一人として、どのように行動したかの記録を残すことができました。この記録の中にちりばめられている言葉からは、病院スタッフそれぞれが心に秘めている職責に対する「高い志」と、それを理解し、危急時に職員を送り出してくれたご家族の深い理解を読み取ることができます。

院外に派遣された赤十字救護班に関しては、院内で病院機能を「日常」に早く戻そうとして力を尽くした多くのスタッフに支えられ、はじめて院外活動が可能となったことを加えておきます。

また、今回の災害は、東北の一病院である当院にも国内外からの多大なご关心・ご支援を示して頂き、世界との「絆」を病院職員一同、再確認することができた機会でもありました。

今回の災害では、「想定外」が随所で言われてはいますが、当院では、数年来の訓練と、それ相応の結果が示されたと思っております。どのような形であれ、「災害」は常に身近にあることを胸に、この冊子の記録が、今後の災害時対応を考える上での参考の1つにでもなれば、多くの悲しみの中、望外の幸せであります。

災害対策小委員会

委員長	遠 藤 尚 文
委 員	遠 藤 公 人
委 員	鈴 木 由 美 子
委 員	武 田 智 子
委 員	大 棒 雄 大 茂
委 員	安 彦 茂 誠
委 員	佐 藤 淳 一
委 員	永 井 てる江
委 員	早 坂 呉 吾
委 員	三 好 誠 長 志
委 員	本 郷 文 樹
委 員	阿 部 文 和 之
委 員	広瀬 和 之

編集後記

事務部長 松本 和夫

平成23年3月11日午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震による東日本大震災から10ヵ月、宮城県の死者数は9,506人、行方不明者は1,861人になり、全国12都道府県では死者数15,844人、行方不明者3,450人になっています。（平成24年1月5日現在・警察庁まとめ）

多くの人命、財産を奪った巨大地震、津波、そして原子力発電所の事故による被害とそれによる苦悩が日本社会を覆っているように思います。

復旧、復興には多くの時間、労力、資金そして国民の結束協調が必要と考えています。大震災後、プレス、マスコミで「絆」という文字がよく使われるようになりました。地域の偏った考え方や言葉だけではない本質的な絆が、今問われているのではないでしょうか。そして復興された後も絆が継続されることを切に願うものであります。

大震災後、被害調査が行われる中で、歴史上の震災が注目され、残されている史跡、神社建造物、過去の災害記録が、私たちに多くの事を教えてくれていたことが伝わっています。過去に学ぶと言うことでしょう。

昭和53年6月12日発生の宮城県沖地震については、昭和58年11月発刊の仙台赤十字病院誌「宮城県沖地震の状況と教訓」に簡単な記録が残されています。

そこで、このたびの大震災における当院の発災からの活動状況を次の世代に伝え、危機管理の資料として「東日本大震災記録集」を発刊する運びとなつた次第です。

発災当時を顧みますとそれぞれ断片的な記憶はあるものの、時系列に関連してまとめるのが難しさがありました。また、災害対応業務に就いている時には、当面の対策に追われ、後に記録にまとめるようなことまでは念頭になかったように思います。そのような中で当院職員が残していた被害状況、災害対応活動をまとめられた災害対策小委員会各位のご努力、ご協力、更に玉稿をいただきました皆様のお力添えに厚く感謝致しているところでございます。

東日本大震災に際し記録集に掲載した活動が出来ましたのは、心ある多くの方々からのご支援と励ましのお言葉があったことを忘れる事はできません。

当院はこれからも日本赤十字社の一医療施設として、地域の皆様とともに歩んで行けるように精励してまいります。

このたびの大震災において、ご支援をいただきました、すべての皆様に衷心より厚く御礼を申し上げる次第です。